

## 483

末梢発生小型肺腺癌の細胞形態と術後病期、  
予後の検討

千葉大学医学部肺癌研究施設外科、病理※

○柴 光年、山口 豊、藤沢武彦、山川久美、  
榎木 茂、佐々木一義、小川利隆、川野 裕、  
斎藤幸雄、岩井直路、深沢利男、大和田英美※

肺の末梢型小型肺腺癌の多くは腺癌であり、発見時早期癌と考えられた症例でも、進行癌であつたり、術後早期に再発を来たす場合も少なくない。今回我々はその細胞形態と術後病理病期及び、予後との関係について検討した。

対象及び方法：1980年より1984年まで、当施設で切除された末梢発生肺腺癌症例中、切除材料で腫瘍径2.0 cm以下の21例を対象とした。気管支鏡、経皮針生検、あるいは腫瘍捺印法により得られたスメアをPAP染色施行し、それぞれの症例につき200個の腫瘍細胞で、細胞質、核の大きさ、核形、核クロマチンおよび核小体につき観察した。なお核の最大径の測定にはDigital Micrometerを使用した。

結果：21例の術後病期は $N_0M_0$  15例、 $N_1M_0$  2例、 $N_2M_0$  3例、 $N_2M_1$  1例と、3期及び4期症例は、21例中4例(19%)であつた。また胸膜との関係では、 $P_0$  5例、 $P_1$  13例、 $P_2$  3例であつた。次に再発との関連をみると、 $N_2$ 例では4例中3例が1年以内に再発、 $N_1$ 例では、2例中1例、 $N_0$ 例では15例中2例が2年及び3年以内に再発した。これを細胞所見と比較検討すると、再発群の核長径の平均は $14.6 \pm 2.2 \mu\text{m}$ で、非再発群の $11.7 \pm 2.0 \mu\text{m}$ より大きい傾向がみられた。特に $15 \mu\text{m}$ を越える例では5例中4例に、標準偏差が $4 \mu\text{m}$ を越える例では4例中3例に早期再発が認められた。クロマチンでは、高度増量の5例中3例に、中等度11例中3例に再発が認められた。軽度増量5例には再発例はなかつた。核形からみるとおれ込みを有する核の出現が比較的多く認められるものは7例で、1例に早期再発が、類円形核が主体のものでは、14例中、5例で再発が認められた。核小体、細胞質に関しては、予後との一定の傾向を見出しえなかつた。

まとめ：腫瘍径2.0 cm以下の末梢肺腺癌での細胞形態と手術予後とを検討すると、早期再発例では、核が大きく、多型性に富み、類円形でクロマチンが濃密で高度に増量しているものが多い傾向にあつた。これ等の症例では、腫瘍径が小さくても進行癌である事が多かつたが、 $N_0M_0P_{0,1}$ のいわゆる早期癌でも、このような細胞形態を示す症例では、早期再発例がみられた。細胞形態の解析より術後再発高危険群の設定が可能であると思われた。

## 484

切除肺癌症例におけるリンパ節転移の実態  
と予後

長崎大学第一外科

○伊藤重彦、橋本 哲、原 信介、謝 家明  
吉田隆一郎、草野裕幸、田川 泰、岩本 勲  
母里正敏、川原克信、綾部公懿、富田正雄

(目的) 過去10年間教室で経験した切除肺癌 258症例のリンパ節転移形式を組織型、分化度、腫瘍占居部位T因子、組織学的胸膜浸潤の程度(p) で検討すると同時に、治癒切除 207 症例のリンパ節転移と予後を検討した。

(方法及び結果) 258 例の組織型は、腺癌 129 例、扁平上皮癌 82例、大細胞癌 35例、小細胞癌 6 例、その他 6 例である。男女比は 3.2 対 1、平均年齢は、 $61.8 \pm 9.4$ 才である。治癒切除 207 例、非治癒切除 51例で、治癒切除率は 80% である。p-Stage は Ia 44.4%、Ib 1.9%、II 11.6%、III 40.6%、IV 1.4% である。

リンパ節転移、特に縦隔リンパ節転移( $n_2$ )をみると組織型では腺癌が 38% と最も高く、扁平上皮癌は 23% で最も低かつた。分化度とリンパ節転移に相関はなかつた。T とリンパ節転移をみると、 $T_1n_2$  例は腺癌、大細胞癌でそれぞれ 20%、33% であるが、扁平上皮癌では 1 例もなかつた。p とリンパ節転移をみると  $p_3n_1$  例は扁平上皮癌が 35% と最も高かつたが、 $p_3n_2$  例では腺癌 53.6%、大細胞癌 66.6% に比べ扁平上皮癌は 35% と最も低かつた。腫瘍占居部位とリンパ節転移をみると  $n_2$  例は右中葉、左上葉、右上葉の順で多く、# 7 リンパ節転移は右下葉が最も多かつた。

次に治癒切除 207 例の累積生存率を出し、リンパ節転移と予後を検討した。 $n_0$  群の 5 生率は 60% で  $n_1$  群 39% より有意に高かつた ( $< 0.001$ )。  $n_0$  群においては、腺癌で  $p_0 - p_1$ 、 $p_1 - p_2$  間に、大細胞癌で  $p_2 - p_3$  間に差を認めた ( $< 0.05$ )。扁平上皮癌では、 $T_1 - T_2$  間に 3 生率で差を認めるが ( $< 0.05$ )、p で有意差はなかつた。 $n_1$  群においては、扁平上皮癌で  $T_2 - T_3$  間に 5 生率で差を認めるが ( $< 0.001$ )、腺癌、大細胞癌では、 $T_p$  で差はなかつた。 $n_2$  群の 5 年生存例はなく、各組織型で  $T_p$  とともに差は認めなかつた。また、 $n_0$ 、 $n_1$  群で組織型に差はなかつたが、 $n_1$  群では扁平上皮癌、大細胞癌に比べ、腺癌の予後は悪かつた ( $< 0.001$ )。

(結論) (1) 縦隔リンパ節転移は腺癌、大細胞癌、扁平上皮癌の順で高かつた。

(2) 小細胞癌を除き、組織型、分化度で予後に差は認められなかつた。

(3)  $n_0$ 、 $n_1$  群においては腺癌、大細胞癌は  $n$  に、扁平上皮癌は T に予後が左右される傾向が認められた。 $n_2$  群においては、組織型、T、p で差はなかつた。